鳴 潮 音

（鳴門教育大学英語科教育コース同窓会誌）
第 30 号（2023 年 7 月吉日再発行）

巻頭言

「ウィズ ChatGPT」

鳴門教育大学英語教育学会
会長　藪下　克彦

コロナ禍に続き，ロシアによるウクライナ侵攻，グローバルサウス，アメリカと中国の覇権争い…など，世界規模の問題が山積する不安な状況に我々は生きていますが，鳴門教育大学・大学院英語コースの卒業生，修了生，元教官・教員，その他関係者の皆様はいかがお過ごしのことでしょうか。朗らかにお過ごしであることを願っております。ご無沙汰しておりましたが，2 年ぶりに「鳴潮音」を刊行することになりましたので，ご挨拶をさせていただきます。

さて，「ウィズ・コロナ」という言葉はもう定着した感があります。残念ながら，これから人類はコロナウイルスと上手に付き合っていかなければならないようです。これからうまく付き合っていかなければならないと言えば，今話題の ChatGPT に代表される AI Tools もあります。（ところで，私は，今年の新語・流行語大賞で ChatGPT が年間大賞とまではいかなくても，少なくともトップテンには入るのではないかと想像しています。製品名は対象にならないと言う人がいらっしゃいましたが，昨年 2022 年に「Yakult（ヤクルト）1000」がトップテンに選ばれています。）そこで，今回は皆さんと一緒に AI Tools，特に ChatGPT について考えてみたいと思います。

ChatGPTに代表される生成AIの特筆すべきことは，コンピュータープログラムではなく我々が普段使っている自然言語で発せられた指示に従ったり，質問に答えてくれるところです。話は飛びますが，去る 4 月 21 日に，実に 4 年ぶりに対面で新入生歓迎会をいつもの会場，アオアヲ ナルト リゾート（旧　ルネッサンス リゾート　ナルト）で開催しました。2020 年と 2021 年は中止，2022 年はオンラインで開催しましたが，やはり対面の方がいいですね。話を元に戻して，今年の新入生歓迎会の閉会の辞を英語で行ったのですが，前半部分は参加者に内緒で，ChatGPT に “Create a closing speech for the welcome party for the new students of the English education department of Naruto University of Education”，という指示を打ち込み作らせた/作ってもらった原稿を読みました。その後，参加者にそのスピーチは良かったと思うか悪かったと思うか訊ねたところ，私の気分を害してはならないと思われたのか，または，トラップ・クエスチョンかと警戒されたのか，または，本当に判断に窮されたのか，はたまた，（私のスピーキングが拙く）理解されなかったのかは分かりませんが，良いとも悪いともはっきりとした反応はありませんでした。スピーチの後半で言ったのですが，その文章は文法，首尾一貫性という意味ではパーフェクトなものでした。しかし，残念ながら，スピーチに必須である（と私は思っている）ユーモアのセンス，その場の雰囲気や参加者が共有している情報を基に即興的にスピーチに取り入れるアドリブなどは無く，平凡（plain vanilla）で面白くない（dull）ものでした。ここでその原稿を転載させて頂きます。

Dear new students of the English department at Naruto University of Education,

I would like to take this opportunity to express my warmest welcome to all of you who have joined us today for our welcome party. We are delighted that you have chosen to pursue your academic journey with us and we are honored to have you as part of our community.

The English department at Naruto University of Education is committed to providing a rigorous and stimulating academic environment where students can cultivate their language proficiency, critical thinking skills, and intercultural competence. Our faculty members are highly dedicated and experienced professionals who are passionate about their work and are committed to helping you achieve your academic and personal goals.

In closing, I would like to thank you once again for joining us today, and for choosing Naruto University of Education as your academic home. We are excited to have you as part of our community, and we look forward to seeing all that you will accomplish during your time here.

いかがでしたでしょうか。ChatGPT の原稿に対して私の下した「平凡で面白味のない」という判断に同意して頂けたでしょうか。同意していただいたとして，詰まらなさの原因は ChatGPT の仕組みを考えれば当たり前のことです。浅学の誹りを覚悟して説明させていただければ，ChatGPT は（映画『2001 年宇宙の旅』のコンピュータ HAL と違い）意識を持って反応をしているわけではなく，これまで人間によって産出されたインターネット上の膨大なデータを（“labeler”と呼ばれる出力を判断する人たちのフィードバックも取り入れながら）「学習」し，入力された指示（prompt）の文字列に共起する確率が高い文字列を出力しているだけで，話し手の個性やスピーチの場の雰囲気や参加者の共有情報などの新しいデータを取り入れることはできないからです。

ChatGPT の他，翻訳ソフト DeepL など AI Tools の出現は英語教育さらに英語教員を無用にするという AI Tools 脅威論を主張する人たち（例えば，山森直人先生）がいますが，私は英語教育（世界共通語として英語が中国語に取って代わられる時は，英語教育を中国語教育に読み替えて下さい。）は不必要になるとは思いませんが，確かに英語教員は不必要になる可能性は否定できないかなと思います。その理由として次のようなシナリオが考えられます。ChatGPT によって生成された英文が自分の意図した内容を表しているか，確認し校正する能力が相変わらず必要とされます。その意味で学習者に対する英語教育の必要性は無くならないと思います。しかし，英語教育の担い手として AI Tools が人に取って代わる可能性はあります。学習する内容やレベルは学習者個人個人によって異なります。AI Tools がさらに発展すれば，学習者一人一人の実力やニーズに基づきオーダーメードの学習メニューを作ってくれ，教師による一斉授業よりもはるかに効率の良い英語学習を可能にしてくれることでしょう。（英語学習に関して述べたことは，実は，どの教科にも当てはまるのですが。）このように AI Tools によって英語教育が完全に「乗っ取られる」前に英語教員ができることは，AI Tools を英語教育にうまく利用し協働していくことだと思います。例えば，これまで英作文指導のネックの一つに，教員が生徒一人一人の英作文を添削すると時間がかかりすぎるので，英作文の課題を出すことに消極的にならざるを得ないという問題があると思うのですが，例えば，授業中に英作文を生徒に書かせ，その文章を ChatGPT に校正（proof reading）させるよう指示し，元の原稿と修正原稿を比較させ，どうしてそのように訂正されたのか考えさせ，わからない時は教師に助けを求める，というような英作文指導などが考えられます。（もちろん，ここでは英語教員が必要な（談話）文法の知識，作文のスキルを持っていることが前提となっていますが。）もうすでに ChatGPT の英語教育での利用に関する実践例は，ぼつぼつ報告されているようです。

長々と AI，特に ChatGPT の我々に対する影響について，特に英語学習・教育との関連で私見を述べさせていただきましたが，好むと好まざるに関わらず「彼ら」は居なくならないので，良き隣人として「共存」していく方法を模索していくしかないでしょう。（あくまでも，映画『マトリックス』における人類と AI のような関係ではなく。）

ここで，（英語教育講座，言語系教育コース（英語），英語科教育実践分野を経て）英語科教育コースの人事動静をご報告いたします。昨年 3 月末日を以って，英語学分野担当の眞野美穂先生が大阪大学　大学院人文学研究科 日本学専攻 基盤日本語学講座に転出されました。先生は，2010 年 4 月に赴任された直後から英語コーススタッフの中核として様々な役目，例えば山森先生の「御目付役」を務められ，お世話になりっぱなしでした。現在，新天地で益々のご活躍をされています。「眞野ロス」により昨年度の前期は日本人専任スタッフが佐藤美智子先生，山森先生と私の 3 人だけになってしまいましたが，なんとか乗り切ることができました。そんな中，10 月に待望のお二人の先生をお迎えすることができました。一人目は，英語文学分野（教免法の分野分類に従って，分野名が「英米文学」から変更されました。）担当の木口圭子先生です。ご専門はイギリス詩，特に20世紀イギリスの詩人Stevie Smith の詩を研究されています。二人目は，英語学分野担当の森山（「山森」ではありません。）倭成（かずしげ）先生です。ご専門は生成文法の枠組での統語論ということになりますが，具体的な研究内容の一端は後の自己紹介文をご覧ください。統語論や意味論を専門とする者は，ある文が文法的か文法的でないか，また，その文にはどのような解釈が可能かなど，門外漢からしたらどうでもいいことを議論することに無上の悦びを感じ，さらに，それを研究（飯）のネタにすることが

できる，ある意味，恵まれた存在です。（ちなみに，かく云う私は意味論を専門としています。）さらに，なんと今年の4月から，もう一人の先生をお迎えすることができました。英語教育分野担当の千菊基司先生です。中高での教育経験が豊富で，ご専門は，英語の授業はどうあるべきか，特にスピーキングの指導方法や，4技能を統合した言語活動のあり方についてご研究されています。以上御三方の自己紹介文を次節でお楽しみください。

最後になりましたが，同窓会員の皆様の益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

1. 着任のご挨拶

「指導のあり方」を学ぶ意義

鳴門教育大学准教授
千菊　基司

みなさん，はじめまして。専門は英語教育学です。教員経験は30年以上に及び，附属学校にいた期間，学習指導要領の改訂が発表されるたび，先取りする形で，新しい授業のあり方を常に実践し，提案してきました。4月からは心機一転，これまで自分が学び，経験してきたことを，今までとは異なる立場から英語教育界に提案し，広く貢献していきたいと思っています。大学での授業だけでなく，徳島市内の中学校・高等学校で指導助言する機会もいただき，新しい挑戦を楽しむ毎日を送っています。

外国語学習の入り口である小学校において，英語が教科として位置付けられたことは，その出口としての高等学校における学習目標の高度化という大きな変化をもたらしました。政策の変化だけでなく，ウェブ上の情報の氾濫や翻訳ソフトの高精度化と普及は，児童・生徒の英語学習環境に劇的な変化をもたらしています。その中で，英語の授業はどうあるべきなのか。処方箋は得られないかもしれませんが，特に大学院では，基本原則を深く考える機会が得られます。基本原則が変われば，行動規範が変わり，日々の仕事の営みの意味が変わります。一緒に研究し，指導のあり方を考え，提案していきませんか。

文学の残酷さと向き合う

鳴門教育大学講師
木口　圭子

2022年10月に英語文学教員として着任した木口と申します。専門はイギリス詩で，特にStevie Smithという20世紀女性詩人を研究しています。

専門がイギリス文学のため，鳴門教育大学では学部2年生の授業「英文学史」を担当しています。イギリスの歴史を知る上で，カトリックと英国国教会の問題が欠かせないため，「英文学史」では良く歴代国王の話をします。四月末の授業では，ヘンリー八世の離婚問題→英国国教会誕生→血まみれメアリー女王→エリザベス一世による英国国教会体制確立から，現在のチャールズ三世までを概観しました。

その後，5月6日にチャールズ三世の戴冠式があったので，翌日のテレビ番組でそのダイジェストを見ていました。エリザベス二世を主人公にしたNetflixドラマ『ザ・クラウン』でも，27歳の若き女王が戴冠式に臨む様子が描かれており，それを思い出しました。このドラマには，エリザベス二世の伯父で，すでに退位した前エドワード八世＝ウィンザー公爵が，テレビ中継で戴冠式を見，涙するシーンがあります。ご存じのように，いわゆる「王冠を賭けた恋」の成就を選択したウィンザー公は，戴冠式を行わないまま譲位しました。時が経ち，若い姪の頭に王冠が授けられるのを見て，彼の胸に羨望や後悔が沸き上がってきたのかもしれません。パリにある豪邸の庭先で一人，バグパイプを吹く彼の目に涙が光る…しみじみとしたあの場面が強く印象に残っています。

ですが，もちろんこのシーンはフィクションでしょう。『ザ・クラウン』は，歴史上実際に起こった事件を織り込みながら，イギリス王室メンバーの生活や心情を生き生きと描き，あたかも事実であったかのように見せていますが，ドラマはあくまでドラマ。作り手の想像の範疇を超えない場面がたくさん混入されています。実際，ドラマがフィリップ王配の不倫を示唆したとして，2022年のシーズン5を王室関係者が批判したと報じられました。数年前，コロナ禍のリモート生活の中，私はこのドラマの熱心な視聴者でしたが，まるで『ザ・クラウン』自体が史実であり，これによって20世紀半ばのイギリス王室の事情を学んだかのような錯覚に陥ることがしばしばでした。物語は，人の心を揺さぶることができるがゆえに，時に私たちは事実を無視して物語を信じてしまうことがあります。物

語は感動を与えると同時に，恐ろしいものでもあるのです。

Stevie Smith は楽しい詩を書きますが，詩，物語，そして英語の残酷さと常に対峙した詩人だと思っています。奴隷貿易で豊かさを得，人口の半分を占める女性を軽視した家父長制を敷き，搾取と支配によって英語を世界に広げた国の文学には，残酷さが伴います。そしてこれは，イギリス文学に限ったことではないかもしれません。英語文学教員としての私の生活は始まったばかりですが，英語や文学の残酷な側面を，今後は幅広く追及していきたい。大きなテーマですが，今は漠然とそんなことを考えています。

ことばのラビリンス

鳴門教育大学講師
森山　倭成

2022 年 10 月に着任しました森山倭成（もりやま かずしげ）と申します。鳴門に来てからは，初めてのことだらけで，試行錯誤の日々が続いております。本コースの先生方にご指導を賜りながら日々の教育と研究に従事しております。

私の学問分野は言語学で，生成文法の理論を用いて言語研究を行っております。私は，数年前から，日本語の「じゃない(か)」という表現が含まれている文に研究の関心があります。(1)の文は複数の意味で用いることができます。

(1)　イチローじゃないか。

例えば，遠くからこちらに歩いてきている人物がいて，はじめそれがイチローに見えたのだけれども，実際にはイチローではなかったときに(1)の文を発することができます。この場合，(1)に含まれる「ない」は「イチローである」という文を否定しています。それだけでなく，目の前に突然イチローが現れたときにも「イチローじゃないか」と言えます。さきほどのケースでは，問題の人物はイチローではなかったわけですが，こちらのケースでは，問題の人物はイチローであるということになります。さらに不思議なことに，上昇調で「イチローじゃないか？」と言うと，当該の人物がイチローである可能性があるという推定の意味になります。このように，「じゃない(か)」には大きく分けて 3 つの用法があります(田野村 1990)。

「じゃない(か)」の不思議はこれだけにとどまりません。「じゃない(か)」から派生してできた「じゃん(か)」や方言形の「やん(か)」のような表現について考えてみましょう。「じゃん」は静岡県から横浜に伝わり，戦後に東京に進出し，その後，全国に拡大したと考えられています(井上 1998)。一方，「やん」は主に関西地方で使用される形式で，前田（1977: 138)によれば，明治・大正頃から使われているということです。(2a)は「じゃん」の例，(2b)は「やん」の例です。

(2)　a.　大谷じゃんか。　　b.　大谷やんか。

「じゃん」と「やん」は，発音が異なるだけで，どちらも「じゃない」の同義表現に過ぎないとお感じになるかもしれません。しかし，(2)の文は，否定の意味（や推定の意味）では取りづらいのではないでしょうか。（松丸 (2001)は東京方言では推定の意味で「じゃん」が使用可能であることを報告しています。）

また，「じゃないか」に含まれる終助詞の「か」は，(3a)のように，「の」で置き換えることができます。ところが，「じゃんか」や「やんか」の「か」は終助詞「の」に置き換えることができません。（「*じゃんの」については松丸 (2001)にも記述があります。）

(3)　a.　大谷じゃないの。
　　b.　*大谷じゃんの。　c.　*大谷やんの。
　　(*は当該の文が不適格であることを表す。)

「じゃん」と「やん」の間にも違いがあります。「じゃん」は丁寧語の「ます」とともに現れることができませんが，「やん」は「ます」と一緒に用いることができます。

(4)　a.　*だから言ってましたじゃん。
　　b.　だから言うてましたやん。

このように掘り下げて考えてみると，「じゃない(か)」という何気ない表現にも，説明に窮するような言語事実が次々と見つかります。このことは「じゃない(か)」のみならず，どの言語現象にも当てはまります。ことばはきわめて複雑な体系をなしていると言えます。にもかかわらず，私たちは当たり前のようにことばを使いこなしてしまいます。こうした言語使用の実際とことばの複雑さとのはざまに「ことばの不思議」が立ち現れてきます。今後，学生のみなさまとことばの不思議を堪能しながら，日々の教育や研究に励んで参る所存です。至らぬ点も多々あるかと存じますが，ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

参考文献：井上史雄. 1998.『日本語ウォッチング』東京: 岩波書店.／前田勇. 1977.『大阪弁』東京: 朝日新聞社.／松丸真大. 2001.「東京方言のジャンについて」『阪大社会言語学研究ノート』3, 33–48.／田野村忠温. 1990.『現代日本語の文法 I―「のだ」の意味と用法―』

大阪: 和泉選書.

2. 報告：専門職学位課程における学び

2020 年度の大学院改組によりそれまでの修士課程言語系コース（英語）が教職学位課程となり，コース名も英語科教育実践分野を経て，英語科教育コースとなり，カリキュラムも新しくなりました。所属学生 2 名からそこでの学びを報告してもらいます。

教職大学院での学び

教職大学院 2 年
宗田　晶子

「大学院で学んでみない？」

偶然にも置籍校に訪問された佐藤美智子先生からのお誘いで，私は大学院入学を決めました。佐藤先生は，私の初任校，鳴門市林崎小学校でご一緒させていただき，大変お世話になった先生です。低学年担任経験が多く，英語から 20 年以上離れていた自分にとって，それは大きなチャレンジでした。

小学校英語の指導力アップに加え，自身の英語力も磨きたいと思っていた私は，1 年生から大学院の授業とともに英語科コースの学部の授業も受講しました。最初のネイティブの先生の授業では，6 割程度しか聞き取ることができませんでした。そしてそれは，毎日の英語学習へのモチベーションとなりました。授業では，すっかり忘れてしまっていた文法の学び直しや心が豊かになるような英米文学，英語科教育の基礎となる音声学や英語教育を行う上での理論など，これから小学校英語を教えていく上でも役に立つものばかりでした。

大学院の授業は，英語科の授業についてだけでなく，学校マネジメントや学級経営など，現場では学ぶことができない理論を学ぶことができ，普段何気なく行ってきた教育活動の裏付けをすることができました。また，いろいろな校種の現職の先生方や学卒院生の方と交流することができ，自分自身の視野を広げることにもつながっていると感じています。さらに，異校種交流のフィールドワークでは，中学校文化について知ることができ，先生方の生徒との関わり方から，自分が高学年児童と関わる時に欠けていたものに気付くことができました。大学院卒業後，現場復帰した時での学級経営の仕方に大きく影響するに違いありません。

大学院で学ぶ中で，自分のさらなる夢も見つけることができました。私の今の合言葉は，The things you can find, if you don't stay behind.—Dr. Seuss です。

私は，大学院に来て本当によかったと感じています。大学院と私を繋いでくださった先生，そして，大学院で出会った皆様に感謝の思いでいっぱいです。

私の志と研究

教職大学院 3 年
太田　敦也

入学から 2 年が経ち，早くも最終学年の年となりました。私は大学卒業後，民間企業で三年働きましたが，教師になる夢を諦めきれず本学に入学しました。誰よりも教師に対する使命感を持って入学したつもりでしたが，現実は甘くありませんでした。挙手を求めても反応がない生徒，全体での発言を躊躇う生徒。実習中私と生徒との間に大きな壁を感じ，想いが届かないことに落胆する日々が続きました。このような感覚は大学時代にも強く感じた時期がありました。私は大学時代，ソフトボール部で主将を務めていました。大事な公式戦で敗れ目標を失った際，私の問いかけに部員が全く反応しない時期がありました。部活を辞めたくなるぐらい辛い日々が続きましたが，部員がもう一度自分の想いを話してくれるようあらゆる手を尽くしました。結果，部員は自分たちの想いやチームに対する想いを口にするようになり，チームとして目標を達成することができました。その経験の中で個人と組織の成長に向き合う素晴らしさに気づき，教員を目指したいという気持ちが生まれました。

私は教育現場においても，生徒が自分を表現することを通じて成長する瞬間を生み出せると信じています。「生徒が自分の想いを形にし，相手の想いや文化を大切にできる」そんな姿を英語の授業を通じて，育てていきたいと考えています。その信念を持って，私は「自己表現を躊躇う生徒に対する心理的支援」を，英語科の研究として取り組んでいます。本学ではフィールドワークを通じて，学校現場の実態把握や実践ができる場が提供されています。また実習校だけでなく，各自治体から派遣されてきた現職の先生方から研究に対する考え方を聞くことができました。本学の環境や先生方のサポートのおかげで，私の視界は広がっていき，目指す姿に近づいている実感があります。また私の原

動力の一つに本学の同級生の存在があります。皆，課題観や志は様々ですがそれぞれの道に向かって精進しており，日々刺激を与え合いながら共に学んでいます。

本学での3年間の取り組みを教壇での自信に変えられるよう，残りの学生生活も充実させていきます。

3. 第35回鳴門教育大学英語教育学会のご案内

今年度の年次大会を下記の要領で開催予定です。

日時：決まり次第お知らせします。

開催方法：オンライン開催（ZOOM）
URLは決まり次第，お知らせします。

プログラム（案）

(1) 開会の辞　薮下克彦（会長）
(2) 研究発表会
　研究発表または実践報告
(3) 報告会
　・教育実習奮闘記　学部4年生
　・留学体験記
(4) シンポジウムまたは講演
(5) 総会
(6) 閉会の辞

・以上のプログラムの内容は変更される場合もあります。最新のプログラムは以下のページにアップされる予定です。

http://www.naruto-u.ac.jp/course/english/

・研究発表または実践報告のご希望がありましたら，以下の学会事務局までお知らせください。大会についてご質問やご連絡がある場合も下記連絡先にお願いします。

連絡先：鳴門教育大学英語教育学会事務局
森山　倭成
E-mail: kmoriyama@naruto-u.ac.jp

お忙しい時期ではありますが，みなさまの多数のご参加をお待ちしております。

4. 『鳴門英語研究』次号

『鳴門英語研究』第29号への論文の投稿を募集しております。投稿締切は2024年1月9日を予定しております。投稿希望の方はその旨を9月末日までに，以下のメールアドレスに「鳴門英語研究第29号投稿希望（お名前）」という件名でご連絡ください。追って，「執筆要項」をお送りします。

・元教員，修了生・卒業生の方は，薮下克彦（学会会長）yabuchan@naruto-u.ac.jp
・現職員，現院生・学部生の方は，森山倭成（学会事務局長）kmoriyama@naruto-u.ac.jp

5. 連絡先更新のお願い

このニューズレターは，鳴門教育大学英語教育学会のニューズレターではなく，鳴門教育大学の英語科教育コースの同窓会誌として発行しています。学会員の方ではなくても，ご自身の連絡先が変わった場合，english@naruto-u.ac.jpまで「同窓会員連絡先変更（お名前）」でメールをいただければ幸いです。

なお，このニューズレターのPDF版や，鳴門教育大学英語教育学会および同窓会関係の情報を英語コースのウェブサイトで逐次アップデートしていきますので，時々，覗いてみてください。

http://www.naruto-u.ac.jp/course/english/

6. 鳴門教育大学英語教育学会の年会費について

年会費およびこれまでの繰越金の処理に関して，理事会にて審議し，処理方法に関する原案を総会にてお示しします。

7. 編集後記

鳴門教育大学英語科教育コースの同窓会誌『鳴潮音』の第30号をお届けします。

薮下先生が言及されているように，AIを中心とした

最近の科学技術の発展には著しいものがあります。私の高校時代は，高校生がスマートフォンを持つことが当たり前になり始めた時期で，スマホを所有していなければ，対人関係や情報収集の面で不利になってしまうという社会がすでに構築されつつありました。その後，スマホは瞬く間に世界中に普及し，小学生でもスマホを持つようになりました。私は昨年の9月まで兵庫県内で暮らしておりました。スマホがいかに私たちの生活に影響を与えているかは，兵庫や大阪の街中を走っている電車に乗ってみれば一目瞭然です。ほとんどの乗客が忙しなくスマホを操作しています。物心のついていない赤ん坊がベビーカーの中で楽しそうにスマホの YouTube 動画を鑑賞し，そばにいる両親がそんな我が子を見て微笑んでいる，という光景を車内で目にしたこともあります。私の担当している授業（英語リーディングや英語基礎研究など）でも，単語の意味や発音を調べるように言うと，必ずと言って良いほどスマホが出てきます。英語が世界共通語であるのに対して，スマホは世界共通必携品であると言えます。

木口先生のお言葉をお借りすると，英語に残酷さがあるならば，スマホなどの科学技術にもある種の残酷さがあるように感じられます。アンデシュ・ハンセン氏の『スマホ脳』がベストセラーになったことに鑑みると，スマホの残酷さに辟易している人は多かれ少なかれいるようです。解剖学者の養老孟司氏は『唯脳論』の中で，太古の昔，人々は自然の洞窟で暮らしていたが，現代人は脳の中で暮らしていると述べています。LINE や twitter，メタバースなどが出現し，普及してきたここ十数年で，ほとんどすべてが脳内で完結してしまうという状況が益々エスカレートしているのではないかと思います。シンギュラリティが到来する頃には，人々の “居住地” はどうなっていることでしょう。

時折，「AI があるからこれからは外国語学習は不要である」とか「AI にはできず，人間にしかできないことは何かを考え，実践していこう」といった意見を耳にします。しかし，AI の発展はこれからも続くでしょうから，人間にしかできないことばかりを模索していたら，私たちにやれることはいつか本当に限られたものになってしまいます。上の意見を真っ向から否定するつもりはありませんが，AI にできることでも，自分が熱中できるのなら，時代の趨勢に翻弄されることなく，徹底的にやってみればよいのではないかと思います。（語学好きなら，ジョン・サールの「中国語の部屋」に閉じ込められた人物のようになりたいとは思わないでしょう。）

大学院生の宗田さんと太田さんには，原稿執筆を急遽ご依頼したにもかかわらず，お引き受け頂きありがとうございました。

最後になりましたが，卒業生・修了生のみなさまのご健康とご活躍を祈念して，本号を締めくくりたいと思います。

（森山）